

名古屋会場（中部地区）テーマフォーラム

- ◆モデレーター：古澤礼太（中部地区担当実行副委員長）
- ◆総合司会：竹下景子
- ◆テーマ：愛・地球的イベント力による SDGs 共創
- ◆実施内容

①開会挨拶

（登壇者）

中村利雄（イベント学会会長）・竹下景子（俳優）

（内容）

名古屋会場の地区別テーマフォーラムでは、冒頭に、総合司会を務めた竹下景子氏から開会が宣言され、イベント学会の中村利雄会長が紹介された。中村会長からは、午前中の講演会の概要および午後の地区別フォーラムへの期待が語られた。



②長期視点を見据えた中部イベントロジー

（登壇者）

古澤礼太（中部大学准教授）

（内容）

開会あいさつに続いて、古澤理事より「中・長期視点から考える中部のイベントロジー」と題して話題提供があった。コロナ禍において、小規模で地域の自然環境、暮らし、技術に根差したイベントや旅行の価値が見直されている点、中部地域においては、2005年の愛・地球博以降、持続可能な開発（サステナブル・デベロップメント）に関連するさまざまな大型イベントが開催されてきた経緯と今後の可能性が提示された。とりわけ、大型イベントの開催に関連付けられたSDGs（持続可能な開発目標）が形式的な理念としてのみならず、地域社会の持続可能性の向上に資する必要性が強調された。



③リレートーク「地球を愛するものづくりと地域イベント復興」

(会場登壇者)

稻本正(東京農業大学客員教授)

エバレット K ブラウン (写真家、イベントアワード審査員)

(リモート中継登壇者)

辻晃一(美濃和紙・丸重製紙企業組合代表)

高橋徹(NPO 法人伊勢河崎まちづくり衆理事長)

上野英二(飛騨高山オークヴィレッジ(株)代表取締役社長)



(内容)

リレートークでは、「地球を愛するものづくりと地域イベント復興」をテーマに、話題提供者として稻本正氏とエバレット・ブラウン氏を迎えて、東海地域3地点をネットで繋ぎ、討論を行った。進行役は竹下景子氏が務めた。

一人目の話題提供者である稻本氏は、「100年かけて育った気を100年使える家具へ」との理念のもと発展させたオークビッジの実体験を交え、持続可能な人と自然の共生関係（共生進化）を論じた。現在、地球上の大型動物の中で人類と家畜で90%を占める『人新世』である事を踏まえて、未来のビジョンを拓く3つの基本的概念として、「多様性(ダイバシティ)、連携(ネットワーク)、創造性(クリエイティビティ)」の必要性を説いた。

二人目の話題提供者エバレット・ブラウン氏は、「With コロナの SDGs 的時間とのつきあい方」と題して、VR(バーチャルリアリティ)を活用したポスト・コロナ時代のイベント形態などを紹介した。他方で、日本文化の伝統的価値についても言及し、日本人が当たり前過ぎて気付かないそうした価値にサステナビリティ（持続可能性）のヒントが隠されていることを指摘した。

インターネット中継は、岐阜県の美濃、高山、そして三重県の伊勢の3地点を繋いだ。美濃から活動紹介を行った辻晃一氏は、美濃和紙を使ったプリント用印刷用紙や宿泊施設の事例を紹介し、伝統に新たな試みを加えることによって地方創生をいかに実現できるかを論じた。NPO 法人伊勢河崎まちづくり衆の高橋徹理事長は、伊勢神宮のお膝元である河崎地区の歴史的町並みと川を活かした SDGs 的まちづくりについて経験談を交えて報告した。飛騨高山オークヴィレッジの上野英二氏は、「SDGs 的物造りと森のかかわり」と題して、1974年に岐阜県高山で創業した家具製造会社「オークヴィレッジ」の



活動を報告した。長年にわたる森づくりと人づくりの歴史を紹介し、近年はカーボンオフセットの数値計算も考慮した循環型共生社会の実現に向けて取り組んでいることを発表した。

④シンポジウム「愛・地球的イベント力による SDGs 共創」

(ナビゲーター)

竹下景子、稻本正

(パネリスト)

古澤礼太(中部大学准教授)「人材育成の視点から」

新井野洋一(愛知大学教授)「リスクマネジメントの視点から」

内藤正和(愛知学院大学講師)「都市づくりの視点から」

原田伸介(イベント学会中部地区本部長代理)「文化創造の視点から」

(内容)

フォーラム最後のセッションであるシンポジウムは、テーマを「愛・地球的イベント力による SDGs 共創」とし、中部地区のイベント学会会員をパネリストとして、異なる視点から、地球と地域を愛するイベントのあり方について活発な議論が行われた。

中部大学の古澤礼太氏は、人材育成の視点から「中部 ESD 抛点」の活動を事例にあげ、SDGs 的な学びについて話題提供を行った。中部地域における分野横断型の ESD (持続可能な開発のための教育) イベントの一例として、多文化共生と生物多様性保全活動を融合させた、日系ブラジル人の子どもたちと森で行う間伐活動が紹介された。

愛知大学教授の新井野洋一氏は、リスクマネジメントの視点から、コロナ感染をめぐって再考すべきポイントを指摘した。それらは、「中間集団の意義」「選択と集中の思考」「危機管理の意味」であった。

とりわけ、午前中に行われた山極寿一氏による基調講演の「集団規模」の話題を受けて、「中間集団の意義」に焦点を当てて、個と社会をつなぐ「中間集団」の重要性を強調する議論を展開した。今後のイベントで注視すべきポイントとして、コロナ禍でさらに拡大した SNS が作る新たな中間集団への対応も指摘された。



愛知学院大学の内藤正和氏は、都市づくりの視点から話題提供を行った。内藤氏は、自身の専門分野であるスポーツ政策の視点から、大規模スポーツ公共施設をめぐる都市づくりの課題を取り上げた。東京五輪が注目を集める中、愛知県でも 2026 年にアジア競技大会の開催が予定されている。大規模スポーツイベントで建設される大規模公共施設を「ホワイト・エレファント」（有り難いが費用に見合った成果が得られない象徴）にしないためには、非日常的な大型イベントの経済波及効果だけではなく、日常時における市民イベント等の利用による非経済波及効果にこそ着目すべきとの指摘がなされた。



イベント学会中部地区本部長代理の原田伸介氏からは、文化創造の視点から話題提供があった。「SDGs の 17 ゴールには文化の項目がない」という山極氏の発言を受けて、文化創造を SDGs に組込む必要性を論じた。江戸時代に尾張徳川藩 7 代藩主宗春により進められた文化創造と経済復興の両立の事例を提示し、他方、現在の名古屋には、継続的に文化を育てる力が欠如していると指摘した。



また、With コロナ時代の新しい「観光のかたち」として、歩くことそのものを観光資源とする「サスティナブルトラベル街道 KAIDO」を提案し、長期的視野で文化の欠けらを拾い集め光をあてる新しいコロナ禍からの SDGs リカバリーを呼び掛けた。

⑤閉会挨拶

(登壇者)

谷喜久郎（イベント学会理事・中部地区実行委員長）

(内容)

閉会挨拶は、イベント学会東海地区本部長の谷喜久郎氏が行った。愛知を中心とする東海地域の今後のイベント発展の可能性や SDGs への期待を述べ、会の閉会を宣言した。

